



日本ラテンアメリカ学会 会 報



1998年12月1日

№. 6 7

1. 理事会報告
2. 研究部会開催のお知らせ
3. 学術・文化情報
 - 『年報』20号論文の募集
(予告)
 - LASA "Section" メンバー
へのお誘い
 - 米西戦争百周年記念シンポジ
ウム
4. 近著紹介
5. 事務局から
 - 次期大会研究発表募集
 - 国際交流ディレクター募集

1. 理事会報告

○第86回理事会報告
日 時：1998年10月17日(土)
場 所：中央大学駿河台記念館
出席者：国本(理事長)、小林(一)、中牧、
小林(致)、西島、遅野井、清水、
高橋(均)、辻、恒川、飯島(書記)、
委任：染田

<報告事項>

1. 理事間の通信方法が確認された。
2. 各委員会からの報告
 - ① 年報第19号へ論文22本と書評論文2本
の応募があった。
 - ② 会報66号が8月5日に発送された。
 - ③ 次期研究部会は3つの地域とも12月中
旬に開催する。
 - ④ 次期大会会場である上智大学の施設の
予約状況が報告され、大会の内容につい

ては引き続き検討することになった。

<審議事項>

1. 新入会員3名の入会を承認した。
2. 『年報』20号の編集方針について、欧文
特集とすることが承認された。(3頁参照)
3. 選挙方法の改正(郵便投票)について、
次回理事会で検討し、来年度の総会に提案
することが承認された。
4. 学会のホームページを開設することが承
認された。
5. LASAシカゴ大会に出席した理事長か
らLASAのJapan Task ForceをJapan
Sectionに格上げするスミス・西島案の進
捗状況が報告された。日本ラテンアメリカ
学会としては理事長がメンバーとなること
でSectionを間接的に後援することが承認
された。
6. その他、以下の事項が承認された。
 - ① 事務局の累積書類について、学会の歴
史的な書類や過去5年間の領収書類を除
いて処分する。
 - ② 会員名簿を次号会報と共に発送する。
 - ③ 会報の発行回数を年3回とする。
 - ④ アメリカニスタ学会へ理事長のメール
アドレスを通知する。

住所変更・異動の連絡および会費納入
に関する問合せは直接下記へお願いしま
す。

(財)日本学会事務センター

日本ラテンアメリカ学会担当・大戸
〒565-0082 豊中市新千里東町1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル14階
☎06-873-2301、FAX 2300

2. 研究部会開催のお知らせ

下記の要領にて本年度第一回研究部会をそれぞれ開催します。会員諸氏は奮って御参加下さい。(問合せ先は会報No66を参照)

<東日本部会>

日時 12月5日(土) 午後2時~5時

場所 上智大学紀尾井ビル109教室

報告 杉下由紀子(コスタリカ大使館)

「メキシコ市における女性家事労働者と支援団体」

志柿禎子(岩手県立大学)

「米国主権下におけるプエルトリコ女性の社会的地位の変化」

<中部日本部会>

日時 12月12日(土) 午後2時~5時

場所 南山大学L棟611会議室

報告 川田玲子(愛知県立大学)

「メキシコ植民地時代の驚の図像とアイコン」

遅野井茂雄(南山大学)

「ペルーにおける制度構築の課題 — 世銀の批判をめぐって」

<西日本部会>

日時 12月12日(土) 午後1時~5時

場所 神戸大学六甲台キャンパス第4学舎
2階共同研究室(阪急六甲、阪急御影、JR六甲道より神戸市バス36系統に乗り神大正門前下車)

報告 長瀬由美(京都外国語大学大学院)

「19世紀キューバにおけるスペインの植民地統治」

穂原三佳(神戸商船大学)

「アレホ・カルペンティエルの作品と音楽形式 — 『追跡』を中心に」

内田みどり(和歌山大学)

「最近のウルグアイにおける社会変動と政治との関わり」

3. 学術・文化情報

○第4回国際マヤ学者会議(4^o Congreso Internacional de Mayistas)

鈴木 紀(千葉大学)

8月2日から8日までの7日間、グアテマ

ラ共和国アンティグア市にて第4回国際マヤ学者会議が開催された。本会議はメキシコ国立自治大学マヤ研究センターとグアテマラ文化スポーツ省人類学歴史研究所によって共催され、両国のみならずアメリカ合衆国やヨーロッパ諸国を中心とするマヤ研究者の国際交流の場となった。分野別では考古学、歴史学、言語学、人類学、社会学等の研究が中心となり、プログラムに登録された研究発表の総数は263にも及んだ。以下、私見もまじえて会議の成果と課題を報告する。

会議の共通テーマは「Identidad Maya」であった。このテーマはエスニシティ、ジェンダー、性的志向などの点で弱者をなす者達の社会的位置づけを問い直す「自分らしさの政治学(identity politics)」が現代ラテンアメリカ社会の重要課題であることを踏まえれば、時宜を得た問題設定であった。特にマヤ系先住民の間ではメキシコ、チアパス州のEZLNやグアテマラにおける汎マヤ主義運動に見られるように、マヤ文化や先住民性の再検討が急務とされており、マヤとは何かという問題をマヤ研究者自身が再考することは非常に有意義なことと思われた。

こうした問題意識のもとに時間の許す限り研究発表を傍聴した結果、私には以下の3点が気になった。第一に、大半の研究は研究対象としてマヤという文化もしくは民族の存在を自明の物とし、そうしたマヤに関する新たな知見を報告するものであった。この種の研究はマヤ民族とは誰なのかという問いに答える正攻法ではあるが、Identidad Mayaを論じることの意味を改めて問うものではなかった。第二に、分科会は概ねグアテマラやチアパス、ユカタンといった研究対象地域単位で組織されており、各会場にはその地域の専門家が集う傾向が見られた。これは同一地域研究者の交流という点では有意義であったが、地域を超えてマヤ民族の全体像を考えるには不十分であった。第三に、組織委員会によりIdentidad Mayaに関するシンポジウムが三夜連続で企画されたが、各夜のテーマは先スペイン期、植民地期、現代と時代区分されており、この三時代を総括する通時的なマヤ・

アイデンティティ論は討議されなかった。また焦点を現代に絞った3日目のシンポジウムでは近年の汎マヤ主義運動の歴史的評価に関する討論が期待されたが、パネリストとして予定されていたグアテマラの先住民学者 N. Cojti やグアテマラの民族史に詳しい C. Smith が欠席し、他の2名による報告はやや平凡な内容に終始した。ちなみに組織委員会は両名欠席の理由を明らかにしなかった。

なお私は本学会会員の吉田栄人(静岡大学)、初谷謙次(天理大学)、桜井三枝子(大阪経済大学)の3氏とともに「民族境界の再創造(Recreación de Fronteras Étnicas)」と題する分科会(8月5日午後)を組んだ。この分科会で私たちは、先住民や研究者自身がマヤラディーノといった用語を用いてアイデンティティを固定することの政治性を論じ、前述した全体的傾向の中ではやや異色の主張となった。会場にはほぼ満席の約35名の聴衆が訪れ、各発表の後には、司会の吉田会員が質問を制限せざるをえないほど活発な質疑応答が行われた。もしこれを成功と呼べるのなら、その理由はこの6月、神戸大学での本学会定期大会において、今回と同一のメンバーで既に分科会を行っていたためであろう。各発表者の論点をお互いに熟知していたため、マヤ学会議の分科会準備は比較的容易であった。もっとも、私たちの研究に対する関心の高さの一因は、日本人研究者という存在の珍しさにあったことは否定できない。今後日本人研究者の一層の参加が望まれるところである。

○第21回LASA大会(シカゴ)に出席して
山岡加奈子(アジア経済研究所)

今回のLASA大会は、去る9月24日から26日までの3日間行われた。毎度のことながら10くらいのパネルが同時進行するが、今年は分野ごとに微妙に日が分けられていて、たとえば1日目は歴史学と社会学、2日目が経済学、3日目が歴史学と国際関係というような並び方をしており、関心によっては3日間通して滞在する必要がなく、前に比べて便利になっているようだった。

『年報』20号掲載論文の募集について

本号の理事会報告にあるように、本学会設立20周年という節目にあたり、年報20号ではすべての論文を欧文にして掲載することになりました。年報全体の分量もやや多めとする予定です。また、原稿提出の締切は例年より早めになります。投稿希望者の募集、執筆要項などの詳細については、次の会報(No68)でお知らせしますが、会員の皆様にはこの機会に奮って投稿されるようお願いいたします。

年報編集委員会

筆者の関心はキューバだったので、キューバ関係のパネルに出ていたが、今年はキューバからLASA大会出席のため80人以上の研究者が米国入国を認められ、大勢参加していたのが印象的だった。ただ、キューバ関係のパネルは主に2日目に集中しており、同日午後2回も発表した筆者は、準備と発表にかなり切りであり他のパネルに出られなかったのが残念だった。

筆者が発表したパネルの一つは「キューバ経済：変化と展望」、もう一つは、日本から田中高会員が組織した「日本とラテンアメリカ：過去・現在・未来」と題されたパネルである。後者では、田中会員と筆者のほか、志柿光浩、竹内恒理、および三澤健宏の各会員が発表を行い、ネアントロ・サーベドラ会員が司会を務めた。日本は、米州大陸以外で最大のLASA会員を擁するそうだが、大会での発表者は会員数の割には非常に少ない。とくに若手会員には、「参加することに意義がある」「恥をかいても若いうちは許される」と自分を励まして(これは今回筆者が自分に言い聞かせていたことだが)、積極的に貢献されることを勧めたい。使用言語は英語のほか、スペイン語とポルトガル語が認められており、英語が苦手でも支障はない。パネル組織者に知り合いがいなくても、LASA事務局の方で適当にパネルを探してくれる。

また、発表そのものよりも緊張するのは質問の時間だが、キューバ経済のパネルでは、

キューバから来た研究者に質問が集中し、また田中パネルは、発表だけで時間切れになって質問時間がとれなかった。いずれにしても、

有名な先生と一緒にのパネルに出れば、質問の攻撃が避けられるというメリットもある。若いうちだけでしょうが…。

L A S A “Section” メンバーへのお誘い

日本ラテンアメリカ学会会員の皆様

初冬のころ、皆様におかれましてはご健勝のこととお喜び申し上げます。さて、このたび、カリフォルニア大学サンディエゴ校カリブ・ラテンアメリカ研究センター（CILAS）のピーター・スミス教授と、L A S A参加における新しい形態である「セクション」を組織することになりました。「セクション」とは従来の「タスク・フォース」「ワーキング・グループ」の代わりとなるもので、L A S A会員間の研究交流を促進することを意図しています。また、「セクション」を組織すれば、自動的に年次大会でのパネル・セッションを開催する権利が与えられます。通常、「セクション」は多年度にわたり継続します。

当「セクション」の全体テーマは「ラテンアメリカと環太平洋」を予定しており、政治、経済、社会、歴史、文学、人類学、など広範な研究領域からの参加が可能な組織を考えています。「セクション」の最も重要な活動は、各年次大会でパネル・セッションを開催することですが、皆様からパネルでの具体的な研究テーマを募集したり、パネルでの報告を呼びかけることとなります。また、その他の活動についても、アイデアを頂いたり、ご協力をお願いすることとなりますが、メンバーには特に義務が生じるわけではなく、あくまでもボランティアな参加をお願いするものです。

なお、セクション・メンバーとなるには、

- ・L A S Aの正会員であること
- ・セクションのメンバー・フィーとして年間8ドル支払うこと

の条件があります。

L A S Aは、研究交流を促進するために各「セクション」が各国の既存のプロジェクトや研究機関と“co-sponsor”となることを薦めていますので、スミス教授は、将来本「セクション」と日本ラテンアメリカ学会と何らかの形で共同事業を実施したいと考えておられます。この件に関し、日本ラテンアメリカ学会の理事会では、既に何らかの形で協力することが承認されています。このため、広く会員の皆様に「セクション」へのご参加を呼びかけさせて頂いている次第です。

以上の趣旨をご理解のうえ、何卒ご参加頂けますようお願い申し上げます。ご参加のお返事を頂ければ、参加者リストを当方でL A S Aに送付いたします。また、実際に「セクション」の活動が始まった時点で、活動内容などについて参加者の皆様に詳しい情報をお送りする予定です。

なお、お返事は、nisijima@rieb.kobe-u.ac.jp (nisijimaにはhがつきません) か、Fax 078-803-0403に頂ければ幸いです。

敬 具
神戸大学 西島章次

4. 近著紹介 佐野誠『開発のレギュレーション — 負の奇跡・クリオージョ資本主義』新評論、1998年、v + 362ページ。

紹介者：谷 洋之（上智大学）

本書は、アルゼンチン経済を題材とする本格的な研究書である。しかし、必ずしも「アルゼンチン経済に関する研究書」ではない。むしろもっと広い理論的関心から執筆された書というべきであろう。

ここ数年、日本の開発経済学の分野では相次いで「テキスト」が刊行されてきたが、そこで取り上げられる具体的事例は、圧倒的にアジアである。同様に発展途上地域に属すると言われながら、ラテンアメリカの事例はあまりにも少ない。このことは、著者が指摘するように、少なくとも部分的には、人々の生活の現場に生起する具体的な事象から理論へという「理論指向的な実証研究」の蓄積が国内のラテンアメリカ研究において不足しているという事実を反映するものであると思われるが、本書はここに架橋しようという試みなのである。

本書は、大きく3部に分かれる。第1部「方法論の抽出」では、従来の開発諸理論のサーベイを行なった上で、それらを乗り越えるものとして「開発の政治経済学」が提唱される。これは「レギュレーション・アプローチ」をベースに「ラディカル」諸派の議論を「ブレンド」したものである。レギュレーション・アプローチは、その用語体系も相俟って、門外漢には即座に理解可能なものではないように思われるのだが、著者は平易な言葉と具体的事例の併用で簡潔でありながら明解な説明を行なっている。

第2部「クリオージョ資本主義 — アルゼンチンの政治経済進化」は、第1部の方法論を使いながらアルゼンチン経済を時系列的に実証分析したものである。その問題意識は、なぜアルゼンチン経済が、世界有数の豊かさを誇った今世紀初頭から「退行的進化」を遂

げ、「発展途上国化」してしまったのかということである。著者はペロン期以降の同国経済を「A型経済」（ブラジルを扱ったリピエッツの「B型経済」に対応）として定式化し、紛争的な賃労働関係およびアルゼンチン社会特有の「クリオージョ的なもの」がその制約要因として作動したことにその原因を帰せしめている。

第3部「何をなすべきか」は、ごく短い終章「異端派総合アプローチのために」から成る。これは、政府の役割を重視する日本の開発経済学 — 世界的に見れば「異端派」である — が抱える課題を指摘しつつ、これを「世界各地に散在する『開発の政治経済学』諸派の成果に照らしてラディカルに鍛え直しつつ、全体としてより高次元の研究プログラムを作りあげる」べきであるとする、著者のマニフェストである。

本書の大きな特徴は、著者の特に理論面での立論のしなやかさである。さまざまな系譜に属する諸理論に対して鋭い批判的視線を向けながらも、その中に優れた部分を見出し、自らの枠組みに取り込んでしまうという建設性は賞賛に値しよう。それにもまして本書が重要だと思われるのは、ラテンアメリカ研究の立場からその成果をそれ以外の世界に向けて問うような作品が生まれたという事実においてである。著者も指摘するように、これは構造学派をはじめとするラテンアメリカの経済学者の伝統でもある。ラテンアメリカ研究者以外の読者 — 一般読者ばかりでなく他分野の研究者も — を獲得できるような仕事を求められる時代にわれわれラテンアメリカ研究者はすでに入っているのだという認識を、本書によって新たにさせられた思いである。

近著紹介 加藤薫『ニューメキシコ：第四世界の多元文化』

新評論、1998年、310ページ。

紹介者：牛島 万（城西国際大学）

米国ではヒスパニック系住民が全体のおよそ9%をしめ、黒人（12%）を凌いで21世紀には最大のマイノリティになるといわれている。従って、ヒスパニック研究は、スペイン語教育と合わせて米国の大学教育で重視されており、またその研究機関も多い。しかし、本書でも述べられているように、日本の米国またはラ米研究者がヒスパニックを研究の題材に取り上げるようになったのはごく最近のことである。その意味で、加藤薫氏がこのたび本書を出版し、日本の学界に新たな学問的問いかけをなしたことは、同様のテーマに関心をもつ評者には極めてよい刺激であった。著者の研究成果に敬意をはらいたい。本書はニューメキシコ州（北部）に地域を限定し、ヒスパニック文化だけでなく、ネイティブ・アメリカン（インディアン）やアングロ系白人の文化との、多元的文化の歴史的形成と現状について検討している。特に著者の専門である美術、ここではチカノ・アートと呼ばれるものに関する記述はさすがに詳しい。基本的には専門家を対象としているが、この分野を知らない読者や学生にもわかりやすく説明されており、優れた研究書といえる。

本書の目次を簡単に紹介しておく、「まえがき」のあと、「第1章：川の流れのままに」で、ニューメキシコにおける聖母マリア伝説やアストラン伝説などについてふれ、その後、ニューメキシコに移住してきた順に、「第2章：ネイティブアメリカンの世界」、「第3章：ヒスパニックの世界」、「第4章：アングロの世界」でそれぞれの文化的特徴とその歴史的背景を取り上げる。そして最終章の第5章で、「多文化共存の世界」と題して今世紀のニューメキシコの多元的文化、つまり著者の言葉でいえば、ニューメキシコの「第四世界」的的文化の特質について考察している。「第四世界」とは難しい概念だが、まえがきにある通り主として経済的主従関係か

らうまれる「南南問題」（ニューメキシコとメキシコの関係）と「南北問題」（米国とラ米の関係）との交差する文化の表徴だ（3頁）。それは、まるで「4次元」空間（同頁）のような、「従来の国家（ネーション・ステイト）概念や国境という人為的区分や国旗・国歌などが関わらない（…）多様な存在関係」（5頁）から成り立っている。

最後に、本書を読んで、不勉強ながらいくつか指摘させていただきたい。第一に、著者は、第四世界的多元文化という空間を設定し、反オリエンタリズム的な視点で分析しようとしているが、現代ヒスパニック文化の現状は、むしろオリエンタリズムの影響を多く受けているのではないかという点である。著者の説明によると、ヒスパニック文化は19世紀以来のアングロ系白人の到来によってほとんど消滅したが、今世紀におけるM・オースティンなどの芸術家の活動やニューディール政策の結果、ニューメキシコの伝統文化が復興した。以来、ニューメキシコは米国でも独特の自然環境と歴史的空間をもつ地域としてアピールされ、これがアングロ系白人にとっての「魅惑」の土地となっているという。このように、アングロ系白人による商業主義的なヒスパニック文化と、その代表的なメタファーとなっている「大自然」・「伝統」・「魅惑」が支配する、「第四世界」における異文化研究の難しさを改めて認識させられた。第二に、まえがきでネイティブ・アメリカンとヒスパニックとのクレオール化について言及しているが、19世紀におけるクレオール化を考察したD・ウェーバーなどの研究成果をふまえた記述はほとんどなかった。第三に、ヒスパニック人口が多く、かつ歴史的背景の異なるテキサスやカリフォルニアのケースとの比較、あるいはジェンダーの視点からのクレオール化論など、今後の課題としての広がりがある。

「世界史の転換 — 1898年 百周年記念シンポジウム」

開催のお知らせ

カリブ海域と太平洋の政治地図を塗り替えた米西戦争は日本では殆ど知られていない。本年百周年を迎えるこの機会に米西戦争とその周辺の事象を省みることにより、これが日本とラテンアメリカを含む現在の世界情勢にどのような意味を持ったかを考察する。

12月11日(金)18:00～20:00 講演 三輪公忠(上智大学外国語学部)

12日(土) 9:00～12:00 講演 David Trask(米国、国務省)

講演 Javier Tusell(スペイン、国立通信教育大学)

講演 Eusebio Leal(キューバ、ハバナ市博物館)

講演 Reynaldo Ileto(フィリピン、オーストラリア国立大学)

13:30～17:00 討論(17:30～20:00 レセプション)

会場：上智大学(四ツ谷キャンパス)10号館講堂

主催：上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、イスパニア研究センター

後援：日本ラテンアメリカ学会

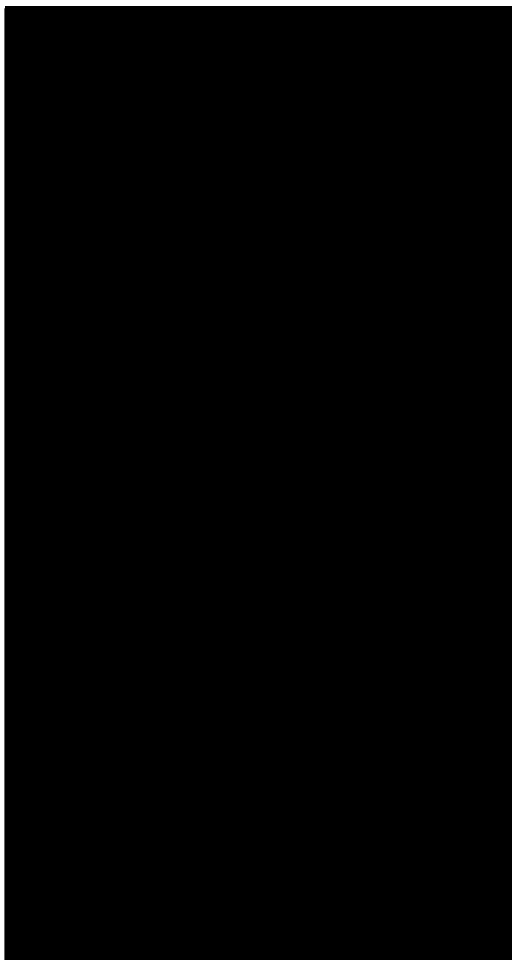
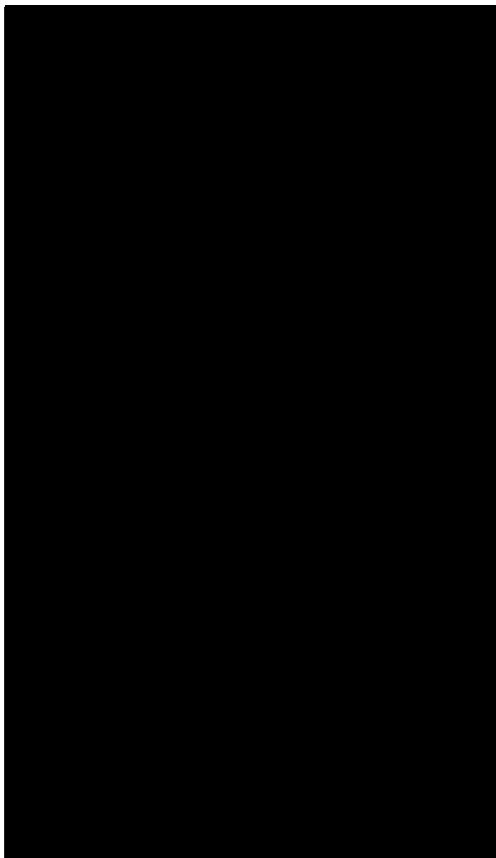
問合せ：上智大学イベロアメリカ研究所 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

Tel. 03-3238-3530 Fax. 03-3238-3229

E-mail: iberor@hoffman.cc.sophia.ac.jp

5. 事務局から

1) 会員住所の変更



第20回定期大会 研究発表および

パネル・ワークショップ募集のお知らせ

第20回定期大会は、来年6月5日（土）と6日（日）の両日に亘り、上智大学四ツ谷キャンパスにおいて開催される予定です。研究発表もしくはパネル、ワークショップ形式（3名以上）の発表を希望される方は、以下の点を明記してご応募下さい。

研究発表：(1) 発表者の氏名・所属、(2) 発表題目とその分野（文学、歴史、政治、経済など）、(3) スライド、OHP、ビデオなどの使用の有無。

パネル・ワークショップ：(1) テーマ、(2) 報告者（3名以上）の氏名・所属・専門、(3) スライド、OHP、ビデオなどの使用の有無。

いずれの場合も、2月末までに下記実行委員会宛、書面にてお申し込み下さい。

連絡先： ☎102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

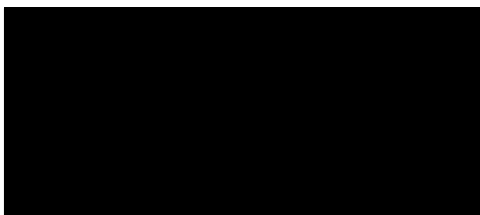
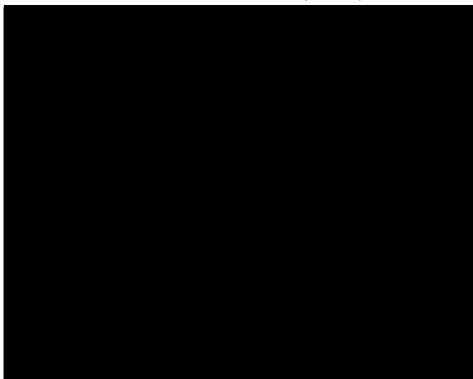
上智大学イベロアメリカ研究所気付

第20回定期大会実行委員会

FAX 03-3238-3229

E-mail: iberohoffman@cc.sophia.ac.jp

2) 新入会員（第86回理事会承認）



3) 寄贈本

S. リベラ・クシカンキ（吉田栄人訳）『トゥパック・カタリ運動—ボリビア先住民族の闘いの記録と実践（1900年—1980年）』
（お茶の水書房 1998年 xxxvi, 284p.
3,400円）

在外教育施設国際交流ディレクターの募集

文部省よりサンパウロ日本人学校専任職員（国際交流ディレクター）の募集の連絡がありました。要領は以下の通りです。

派遣期間：1999年4月より3年間。

資格要件：ポルトガル語が堪能であること。

原則として派遣時の年齢が30歳以上60歳未満であること。

職務内容：在外教育施設における教育・文化・スポーツなどを通じた国際交流に関する事業の企画及び実施など。

募集締切：1998年12月18日（消印有効）

問合せ先：文部省教育助成局海外子女教育課在外教育施設指導係

東京都千代田区霞が関3-2-2

電話：03-3581-4211（内線2441-2）

編集後記

ここ数年「百周年」行事が目白押し。おかげで文化予算がつくのはありがたいが、次はあと百年待たないといけないのかと心配にもなってしまう。某私大のように5年ごと記念してはいかがかな？（飯島みどり）

No.67

1998年12月1日発行

☎192-0393 東京都八王子市東中野742-1

中央大学商学部

国本伊代研究室気付

日本ラテンアメリカ学会事務局

TEL 0426-74-3644（研究室直通）

FAX 0426-74-3651（研究室受付）

E-mail: iyo@tamacc.chuo-u.ac.jp